



現在、黒潮大蛇行の真つ最中である。黒潮の流路は大きく2パターンある。ひとつは通常の非大蛇行経路と呼ばれる四国、本州南岸に沿って北上する流路、もうひとつは大蛇行経路で、紀伊半島沖で南へ大きく離岸して沖側を通る流路である。

前回の黒潮大蛇行は2004年の夏から1年ほど発生した。今回は2017年夏の発生から2年半以上が経過しているが、まだ終わる兆候はない。この黒潮大蛇行はカツオ、イカなどの漁場位置や漁獲量に影響を与えると言われているが、海藻の養殖や分布にも大きな影響を与える。気になるのはその影響によって海藻の生長や収穫量を増加させたり、海藻の分布域が拡大したりするのかもしれないことだが、思わせぶりに書き始めたもの

の、その疑問にしっかりと答えられることはできない。

黒潮大蛇行は鳥羽海域に高温と異常潮位をもたらす。

黒潮が紀伊半島から離れるため水温は下がりそうだが、紀伊半島を大きく迂回した黒潮本流は伊豆半島あたりにぶつかり、東西に分かれて本流は東に進むのだが、このときは東に進むのだが、このとき分かれた枝流は西に向かい、鳥羽海域を温める。そして、くわしい説明は割愛するがこの東から西に流れる潮流の右側(つまり渥美半島や志摩半島沿岸)では海面が高くなる。

鳥羽や志摩地域ではワカメや黒ノリ、アオサの養殖が盛んに行われており、これらにとってこの大蛇行は良い影響を与えているとは言えない。これらの海藻は、秋に種苗を海に出し生長させる。この沖出しのタイミングで水温がしっかりと低下してほしいのだが、黒潮の影響で一昨年も昨年もの下がり方が鈍くなっている。

この沖出しは各人の経験や判断で行われるため、必ずしも種苗生産に失敗しているという訳ではないのだが、地球温暖化との相乗効果からか、

この1、2年はこれまでに経験したことのないような海況になっており、生産者の頭を悩ませている。また、うまく生長させた後も、場所によっては藻食魚類の活性が低下せず、若い芽を食べつくされたという話も聞いている。

伊勢湾奥や的矢湾などにおいて支柱式養殖法で生産される黒ノリやアオサでは異常潮位の影響は深刻である。支柱式養殖法は潮位変化により、一時的に海藻が干上がることを期待して網を設置する。生



黒潮の流路



黒潮大蛇行による海水温への影響

長段階や時期に応じて干出時間を変えるため、養殖網を張る水深を巧みに変化させている。しかし、この異常潮位による不規則な高潮位により、網の設置水深の決定が難しくなっており、潮に浸かりすぎたり、干上がりすぎたりすることにより、生長不良がみられる網もあるようだ。

養殖海藻ではないが、ヒジキの分布や生長にも大きな影響を与える可能性がある。ヒジキは夏に受精卵を放出し適正な場所である潮間帯上部(親ヒジキがすでに生えているような浅い岩場)に付着する。この受精卵の定着には潮の干満も大きく影響していると思われるが、異常潮位により本来の水深より浅いところに付着してしまい、異常潮位が回復した年に浅場で生長したそれらは干上がりすぎて枯れてしまうというようなことも考えられる。

鳥羽市民が愛してやまないケノリ(カヤモノリ)も同じような水深に暮らす海藻である。水産有用種であるヒジキやケノリだけでなく、ほかの潮間帯上部の海藻やもつと深いところで藻場を作っているアラメやホンダワラ類にも大

きな影響を与えているはずである。

悲観的なシナリオを述べてきたが、読者を不安な気持ちにさせようというのではない。自然に生きる動植物は大きく変動する自然環境の中をなんとか生き残るようになんておぼろげな状態でもこれまで通りの状態で暮らし続けるということも十分考えられるし、大部分はそうである。宮々とわれわれに恵みを与え続けている黒潮でさえ、あっさりとその流路を変え、周辺の環境を変えてしまっただけだということを知ってほしかったのである。そしてその変化の連鎖反応は予測も難しい。

この自然環境を管理しコントロールすることは不可能と断言していいだろう。しかし、その大きな変化に暮らして経済活動を合致させるべく地域を超えて知恵を合わせ、持続可能な社会を計画することはどうだろうか。「可能だ」と天気の手を上げることができないが、地球環境に変化を加えはじめて1万年余り、繁栄を続けてきた人類であれば、新たな道を作りたいものだ。